

マスク生活の外見への影響

竹島拓海 (22111218tt@tama.ac.jp)

1. 問題と目的

2019 年末頃からコロナ感染が始まり 2020 年から感染者数はピークを迎え、現在は落ち着きつつある。感染当初からマスクの着用を強いられており、電車や学校・会社等の公共施設では着用しなとけない状況が続いた。2023 年春頃から規制緩和が入り、脱マスクが目立つようになった。感染当初から今日までどのようにマスクの有無で外見での羞恥や不快感、安心感などのような変化あるのか興味を持った。

先行研究

本研究は鈴木・矢澤(2022)を参考に研究を実施する。鈴木・矢澤(2022)の研究の目的はマスクの有無による外見に関する他者からどう見られているように感じるかを明らかにするのが目的である。

10 代から 20 代の男女を対象とした web 調査を行い、予備調査で対象になったデータを分析に用いた。

調査内容は「脱マスク外見不安」「自公的自意識」「身体醜形懸念」「外見羞恥心」「今後のマスク着用予定」である。性差によって結果が分かれ、女性は外見を意識してマスクを付け、男性は外見でない対人不安による着用示された。

性別による違いが示されたので、この研究ではマスクの規制が緩和された時期に入学してくる 1 年生からコロナ禍に入学してきた 4 年生による年齢差の外見の意識の変化の違いを明らかにするのが目的である。

調べることによって何を分きたいのか

2. 方法

多摩大学在学中の学生を対象とし、グーグルフォームによるアンケート調査を行う。先行研究で使用した脱マスク外見不安、公的自意識、身体醜形懸念、外見羞恥心を一部抜粋して設問を作成する予定である。

脱マスク外見不安はマスクを外すことへの不安について、主に素顔を見られることの回避の傾向を測定する 6 項目を設定している。

公的自意識は他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度を測定するために自意識尺度短縮版 10 項目版のうち公的自意識の下位尺度を使用した 5 項目を設定している。

身体醜形懸念は身体醜形懸念の程度を測定するために Body Image Concern Inventory(BICI)の日本語版を使用した 19 項目を設定している。

外見羞恥心は外見に関する羞恥心の程度を測定するために Body- and Appearance-related Self-conscious

Emotions Scale(BASES)の日本語版の Shame の下位尺度を使用した 4 項目を設定している。

3. 引用文献

鈴木公啓; 矢澤美香子. 脱マスク不安と外見意識—身体醜形懸念と身体外見羞恥心を用いた検討—. ストレス科学研究, 2022, 37: 49-53.